

令和 4 年 5 月 23 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K13556

研究課題名（和文）古代末期における教会法と歴史叙述の研究

研究課題名（英文）Church Law and Historiography in Late Antiquity

研究代表者

田中 創 (TANAKA, Hajime)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：50647906

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：ローマ帝国の末期に、キリスト教が国家の公式宗教としての地位を得たことに伴って、ヘレニズム・ローマ共和政期以来の伝統を持つローマ社会も、それまで社会的少数派であったキリスト教会も、変化を強いられることになった。本研究では、キリスト教会の側がこのような状況下で自らの歴史叙述の様式を変容させていった過程を分析し、伝統的な古典文学の作法をも取り入れていったことを示したほか、教会会議規定集成においては、5世紀半ばごろを境として、過去との連続性の示し方、規定の編纂の仕方に変化が認められることを指摘した。また、帝国を形成する諸都市の外交交渉の中で、使徒の伝承や聖人伝が果たしていた役割を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

広範な支配領域を誇った古代ローマ帝国内には、共通の教養としての古典古代的伝統に加え、多様な在地文化の伝統があった。これらの文化が、キリスト教を公式に採用するようになったローマ帝国のもとで受け継がれ、変容していった過程は、20世紀末以来隆盛を誇る古代末期研究の重大な研究対象となっている。本研究は、教会史叙述、教会規定の編纂過程を特に大きな着目点として、その実相を明らかにした。この研究の成果は古代、中世といった古典的な時代区分で分けられがちな時代についての連続性の側面を明らかにするとともに、地中海周辺地域の文化的共通性や地方ごとの特殊性を浮かび上がらせることにつながるものである。

研究成果の概要（英文）：When Christianity became an authorized religion of the later Roman Empire, Christians were confronted with a new demand of social roles within the empire. In this project, I investigated Church Histories and Canon law collections to fathom the extent to which Christian Church had adjusted itself to a new role in the Roman Empire. Church Histories were written under the influence of doctrinal disputes on the orthodoxy. In this political context, I ascertained that some technics of classic historiography were deployed to enhance the legitimacy of a party. Furthermore, the investigation of Canon collections shows that in the fourth to fifth centuries, Christians amalgamated their resolutions with those of the preceding orthodox councils while in the later period they got more aware of individualities of church councils which had determined canons. This implies that the doctrinal concern of the early centuries ceded to the demand of reference in the daily practice.

研究分野：人文学

キーワード：西洋古代史 キリスト教 歴史叙述 教会法 文化変容 都市 神話

1. 研究開始当初の背景

(1) これまで申請者は、修辞学教師リバニオスの伝える東方の大都市アンティオキア、あるいは法史料・碑文史料などからうかがえるローマ帝政後期の都市を主として研究対象としてきた。しかしながら、後4世紀以後、ローマ社会内に急速に広まりつつあったキリスト教会の描き出す都市社会像を加えることによって、都市社会の実相をより立体的に浮かび上がらせる必要を感じられていた。

(2) 国内ではローマ帝政後期から中世初期にかけて、キリスト教会については教義をめぐる論争とその政治性、あるいはそれに伴う教会の分裂事情などの研究や、ヨーロッパ中世初期やビザンツ社会に関する法史料や、古典著作家の歴史作品などに関する研究は多数存在したものの、教会法や教会史を史的に分析した研究成果は少なかった。他方、国外では、史料の文献学的分析が進み、教会史料についても、教会法史料についても見直しの気運が進みつつあり、それらを申請者の進める古代末期アンティオキア研究と結びつける研究土壌が整いつつあった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、ローマ帝政後期における教会史ジャンルを基にして新しい歴史観がどのように形成されていったのか、諸教会間での情報伝達と、ローマ帝国当局や都市など行政的組織と教会が結んだ関係はどのように展開したのか、教会法集成はどのような形で形成されていったのか、という3点を分析することを主眼に置いた。そして、これらを通して、公式宗教とされたキリスト教がどのようにローマ社会に受け入れられ、その支配的地位を正当化していったのかを描き出すとともに、社会自体が遂げた変容を少しでも明らかにすることを旨とした。

(2) 教会法集成については、その集成全体を単に静態的に叙述するのではなく、テキストが確定されるまでの動的な発達過程に着目する。その際、ローマ帝国内各地に存在する諸教会間での情報伝達を通じて確定されていったという水平的な発達側面に目を配りつつも、とくに、時代を経る中で文書が追加され、総体として一つの「歴史物語」を語るように再編されていく垂直的な発達側面について描き出すことを目指した。また、ローマ帝国(なお、西ローマ帝国滅亡後についてはゲルマン諸国家)内での各教会の対抗関係とそこで発達した教会ごとの教会史叙述にも目配りすることで、教会間に存在した緊張関係や、中世に規範として伝えられた古い教会会議規定がいわゆる「正統」教会だけの観点から集められたものだけではなく、複雑な歴史的経緯の結果蓄積されたものであることを解明しようとした。

3. 研究の方法

(1) 主たる研究対象として、ローマ帝政後期の教会史史料、そしてローマ帝政後期に開かれた教会会議の規定を多数伝えるCodex Veronensis LXを据える。それらを他史料の情報と適宜突き合わせながら、ローマ帝政後期に変容を遂げていった都市社会の実態、歴史像の構築過程を明らかにすることを旨とする。

(2) キリスト教会が公式な宗教として採用され、社会が変容していく時期に特に注目することや、申請者のこれまでの研究対象領域との兼ね合いもあることから、4～6世紀を主たる研究対象の時代として設定する。地域としては、ローマ帝国支配下にあった地中海圏全体を据え、ギリシア的東方地域とラテン的西方地域の間での文化交流、教会間情報の伝達過程を捉える。

(3) 基本的には既に公開されている校訂本を基に研究を進めるものの、Codex Veronensis LXに関しては、写本上のレイアウトや着色などを実見する必要があることから、現地調査を行う。また、日本国内でアクセスできない文献類については海外の図書館・研究所を利用する。得られた研究成果は、国内での学会発表や出版による公表に加えて、可能な限り、欧米言語での海外向け発表を行うことで世に問う。

4. 研究成果

(1) 教会史については、5世紀半ばに活躍したテオドレトスの『教会史』と6世紀末のエウアグリオスの『教会史』を主として分析の対象とし、後300年頃に活躍したエウセビオスの『教会史』からの変容を検討した。前者からは、いわゆるネストリオスの教説をめぐる論争の中で、アレクサンドリア教会の主張に対抗するために様々な文学的手法を駆使していたことを示した。また、エウセビオスに遡る教会史的叙述手法を用いながらも、キリスト教が公式の宗教とされている5世紀の情勢も相まって、いわゆる世俗君主の事績を巧みに叙述に取り入れ、自派の歴史観を展開していることを見出した。エウアグリオスに関しては、これらの教会史伝統に従いながらも、古典文学の歴史叙述の手法を取り入れた記述を基に、6世紀の政治情勢に応じた、教説をめぐる論争にとらわれない叙述姿勢を取っていることを指摘した。

(2) 教会がローマ政府や都市当局と結んでいた関係としては、神話や都市称号を利用した地中海諸都市の外交活動に着目した。既に地中海圏では、ヘレニズム、ローマ時代を通じてギリシア神話の物語を利用し、それらを適宜改変しながら諸都市が互いの外交交渉を行っていたこと、また近隣の諸都市が自都市の優位を主張するためにそれらの神話を利用していたことはつとに指摘されていた。本研究では、カルケドン教会会議の議事録に認められる都市間抗争や、5世紀ガリアの教会情勢などに着目し、これらの神話を利用する伝統はキリスト教会にもある意味で継承され、使徒の伝承や聖人伝が都市間の駆け引きで利用されていたことを浮き彫りにした。また、多数の書簡の翻訳からも、キリスト教化が進む帝国内で諸都市の有力者が結んでいた関係について、そのネットワークのあり方を具体的に抽出することができた。

(3) 教会法史料については、Codex Veronensis LX に収録されている、教皇ダマスの決定を追認したアンティオキア教会の決議にまず着目した。4世紀末の政治情勢の変化に応じてアンティオキア教会が巧みにローマ教会の権威を利用しながらも、自らの教義と正当性を主張するために作られたその決議からは過去の伝統に自教会を接続しようとする文書の利用法が認められた。具体的には、自派の過去をニカエア公会議に列なる正統派の記憶に接続させ、一体化させるというものであり、この手法はただに本決議で確認されるのみならず、4世紀から5世紀の他の決議事例からも並行例が抽出された。これに対し、5世紀半ばから6世紀にかけては教会会議を個別具体的に明示した形で教会決議を整理・収集する姿勢が広く認められるようになり、過去と現在を直接連続する形とは異なる決議集成の発達が確認された。なお帝政後期から初期中世にかけて教会法と並行して現地社会で広く利用されたローマ法に関して、学説の整理や史料の翻訳なども随時進められた。

(4) ローマ帝国のキリスト教化という問題は、単なる古典的伝統を持つ過去との訣別ではなく、ヘレニズム・共和政ローマ以来の伝統を伴う社会の変容という側面を持つ。また目を転じてキリスト教会はといえば、国家に公認されない少数派宗教から一転して、国家体制内に取り入れられたことで、自らの持つ過去からの大きな転換を迫られた。本研究は、このような動的な転換を教会史史料の叙述姿勢や、都市外交のあり方、教会法集成の編集方針などから総合的に捉え、その諸相を明らかにした。教会は、ローマ帝国内に以前から存在した都市外交の原理を、キリスト教の使徒伝承や聖人伝に置き換えながらも、継承した。また、教会史においては、伝統的な古典的歴史叙述の手法、あるいはヘブライ的な神の恩寵概念を利用しながらも、ローマ帝国政府の叙述の割合を増やしていき、政府の公式な政策と教会の結びつきを関連させる歴史叙述を発達させたことが明らかになった。この歴史叙述のあり方には、公式宗教に取り入れられたことで深刻化した教義論争の影が認められたが、同じことは教会会議規定の集成にも認められる。教会会議規定の編集においては、ニカエア公会議に始まる過去からの連続性を強調する編集方法は、教義論争の深まりやニカエア会議との時間的懸隔の影響もあり、次第に廃れていく。代わって登場したのは、現実的な規定の適用に応じて参照の便に供する、個別の教会会議名を保持した編纂方法であった。しかし、これらの集成が中世世界に受け継がれるようになるまでには、地域ごとの伝承の差異化と、6世紀に起きた、地中海圏全体での総合という相反する動きがあり、この複雑な動態を見極める上でのCodex Veronensis LXの重要性が改めて浮き彫りになった。カロリング朝期に至るこの受容の観点については、今後の研究課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中 創	4. 巻 48
2. 論文標題 教会史の系譜 ローマ帝政後期における歴史叙述の伝統と変容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 西洋史研究	6. 最初と最後の頁 150-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 創	4. 巻 2
2. 論文標題 <史料紹介>(翻訳)ユースティニアヌス『法学提要』(1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ローマ法雑誌	6. 最初と最後の頁 222～303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/ARK_2_222	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 5件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 田中 創
2. 発表標題 カルケドン公会議事録から見る初期ビザンツ社会
3. 学会等名 慶應義塾大学言語文化研究所2019年度公開講座（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hajime TANAKA
2. 発表標題 Between Hellenism and Christianity: Cities of the Later Roman Empire in the Acts of Chalcedon
3. 学会等名 Peking University Humanities Forum（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 創
2. 発表標題 古代末期の視点から
3. 学会等名 第69回日本西洋史学会小シンポジウムI (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中 創
2. 発表標題 教会史の系譜：ローマ帝政後期における歴史叙述の伝統と変容
3. 学会等名 東北大学西洋史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hajime TANAKA
2. 発表標題 Transmission of Council Documents: A Case of the Fourth-Century Antiochene Church
3. 学会等名 The Fourth Euro-Japanese Colloquium on the Ancient Mediterranean World (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hajime TANAKA
2. 発表標題 Comment on Lihong SONG, Synagogue Mosaics in Ancient Palestine: A Chinese Ekphrasis
3. 学会等名 The 11th Japan-Korea-China Symposium on Ancient European History: Control and Subordination in the Ancient Mediterranean World (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中創
2. 発表標題 「古代地中海世界における知の伝達の諸形態 口承・文字・画像」コメント
3. 学会等名 第67回日本西洋史学会小シンポジウム2（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 金澤 周作、藤井 崇、青谷 秀紀、古谷 大輔、坂本 優一郎、小野沢 透	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 340
3. 書名 論点・西洋史学	

1. 著者名 東京大学教養学部歴史学部会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 東大連続講義 歴史学の思考法	

1. 著者名 リバニオス、田中 創	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 676
3. 書名 書簡集	

1. 著者名 荒川 正晴、大黒 俊二、小川 幸司、木畑 洋一、富谷 至、中野 聡、永原 陽子、林 佳世子、弘末 雅士、安村 直己、吉澤 誠一郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 306
3. 書名 ローマ帝国と西アジア 前3?7世紀	

1. 著者名 田中 創	4. 発行年 2020年
2. 出版社 NHK出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 ローマ史再考	

1. 著者名 Yoshiyuki Suto	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Phoibos	5. 総ページ数 295
3. 書名 Transmission and Organization of Knowledge in the Ancient Mediterranean World	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------